多言語・多文化の中で暮らす子どもたちにとっての補習校

前ブラッセル補習授業校（ブラッセル日本人学校補習校）校長
北海道札幌市立山鼻南小学校　校長　東　間　義　孝

キーワード：在外教育施設、補習校、ベルギー、多言語・多文化、学校経営（学校運営）

１．はじめに

2017年度から２年間、日本国籍をもちベルギーで頑張っている小・中学生300名が学ぶ補習校の校長として、派遣いただいた。自身のこれまでの教員、教育行政、学校管理職での経験とは全く異なる環境の中で、学校経営（学校運営）を行うことができたのは大変貴重な経験となった。

赴任したベルギーは、華麗な中世文化の息吹を伝える国である。国境を大陸側でフランス、オランダ、ドイツ、ルクセンブルグと接し、ユーロトンネルでイギリスとも通じている。地理的・地勢的な点から「ヨーロッパの交差点」「ヨーロッパの心臓」とも言われ、私が住む北海道の半分にも満たない広さにおよそ１千万人が暮らしている。公用語は、歴史的・政治的な背景から、南部ワロン地方はフランス語、北部フランダース地方はオランダ語、東部の１部はドイツ語と３つある。また、約120万人が住むブリュッセル首都圏（Bruxelles）〈英語読みはブラッセル（Brussels）〉には、欧州連合（EU）本部や欧州委員会が置かれ、北大西洋条約機構（NATO）本部もある。EU関連機関や諸国際機関の数は1,000を超えるなど、ヨーロッパ有数の国際都市であることから、多くの人が英語も使いこなしている。

このような多言語・多文化の中で暮らし、さらに日本の教科書を使って学ぶ補習校の子どもたちは、日本語を含め多言語でコミュニケーションができる子が多いことへの驚きから赴任はスタートした。

EU本部

２．日本国籍を有する子どもたちが通う教育環境

ベルギーには6,500名の在留邦人（駐在や国際結婚、留学・長期滞在者）がいる。そのうち、日本国籍を有している小中義務教育対象児童生徒は約900名。月曜日から金曜日、その1/3の約300名が日本人学校（全日制）に通い、残り2/3の約600名が現地校や国際学校に通学している。その現地校や国際学校に通う子どもたちの約半数の約300名が、さらに土曜日２つ目の学校である日本人学校補習校に通ってくる。

(1) 月曜日から金曜日まで通う、現地校や国際学校

現地校の教育制度は、初等教育学校６年間（日本の小学校に相当）と中等教育学校６年間（日本の中高一貫校に相当）の計12年間が義務教育である。入試を受けずに入学・進学でき、学費が無料である。週５日制で、水曜日は午前授業となり、午後は各自地域で行われている芸術やスポーツなどの課外活動に参加している子が多い。

ベルギーではオランダ語、フランス語、ドイツ語の３つが公用語であり、地域によって異なることは先に述べた。そこで母語以外の語学教育は「外国語」ではなく、「国内で使われる言語の勉強」として小学校など早くから学ぶことになっている。例えば、フランス語を公用語とする現地校では、第２言語としてオランダ語を、中等教育学校からは英語、ドイツ語など数カ国語から第３言語を選んで学習する。他の言語を公用語とする地域も同様に多言語を学習することになり、多言語・多文化にマッチしたカリキュラムを工夫している。

そもそも、教育政策に関する権限については、1989年以降中央政府の手を離れて国レベルではなく、連邦を構成する言語共同体（言語圏）の専管事項となった。ベルギーでは、子どもが大人になって選挙の際に、自分で考えて投票できる人間を育てることを究極の目標としている。そのために、学校で知識を得、判断力のある人に育てていく教育を行う。したがって、成績によっては落第、留年措置もある。ベルギーの人たちには、その子が当該学年のことを身に付けていくことが本人のためになると考えられているため、未だ身に付いていないのならば留年してでも学ぶことが当然のこととしている。しかし、初等教育学校5年生で全体の25%、中等教育学校2年生では約40%に留年経験有りとの統計もあり、本当に子どもの育みに有益なのかとの議論もある。

また、国際都市ブリュッセルやベルギー第2の都市アントワープには、ブリティッシュスクール・アメリカンスクール・リセ（フランス学校）・ドイツ学校などが多数あり、現地校ではなくこれら国際学校に通い多言語・多文化の中でお子さんを育むことを選択される方も相当数いる。

(2) さらに土曜日、子どもたちが通ってくる補習校

日々異なる言語環境や教育環境で学んでいる子どもたちが、お金を払ってでも、また片道1時間半かけて隣国からでも、さらに土曜日補習校に通ってくる。ブラッセル日本人学校は、同一理事会の下（ちなみにPTAも1つの組織）、補習校（土曜日、国語と算数・数学を学ぶ約300名が在籍）と全日制（月から金曜日に学習指導要領に基づいた学び、こちらも約300名が在籍）を併設し、自前の校舎を共用しながら学べる世界的にも珍しい設立45周年を迎える学校である。

真剣に学ぶ生徒たち

指導する先生は、日本人学校（全日制）と異なり教員免許を必ず有しているとは限らず、土曜日だけ指導に来る講師である。文部科学省からの派遣教員は私1名のため、校長は担任への指導助言、保護者対応のほか、用務員や養護教諭の業務、担任外業務、教頭業務、そして校長としての学校運営や理事会対応など、全てを行うことを求められる。お陰様で私が赴任した補習校では、教職員や保護者と「チーム補習校」を合い言葉に、子どもたちの笑顔のために知恵と力を合わせて魅力ある学校づくりを進めてきた。

3．魅力ある学校づくり

ベルギーの学校では、先生は勉強を教えるプロであるというプライドをもち、また威厳もある。したがって、大変厳しく、子どもと先生の間に一定の距離を置く。日本のように、先生が子どもと一緒に遊ぶということは全くない。それは、先生や学校がするべき仕事ではない。学校の役割と家庭の役割というのがはっきりしている。このような学校文化の違いがあるからこそ、ベルギーでも日本の教育を受けられる補習校が求められている。

子どもが2つの学校の宿題は大変だけれど毎週通いたくなる、また保護者にとってはお金を払ってでも我が子を通わせたくなる学校づくりに向けて、「子どもの安全」と「良質の教育を提供」を重点にした学校改善を積極的に進め、在任中の2年間で児童生徒数を10%以上増やすことができた。以下、その具体を挙げてみる。

(1) 良質の教育を提供する学校へ

＊講師の授業力向上（研修機会の充実と工夫、示範授業を積極的実施、土曜授業後ショートOJT（On-the-Job Training：現任訓練）「即ワンポイントアドバイス」の実施、校長だよりで授業改善の具体を発信）

＊ICTの有効活用（タブレット端末を使った資料提示、フラッシュカード、講師全員に保護者との緊急連絡用学校eメールアドレスを付与）

＊全日制との連携充実（研修、PTA行事での子ども相互交流）

(2) ベルギーにいながら日本を感じ、楽しく学ぶ学校へ（「共育」をキーワードに保護者の協力を得て）

＊「朝の読み聞かせ」を「ボランティア」を立ち上げて実施

＊「鯉のぼり」「七夕飾りや短冊」「餅つき大会」「書き初め会」「正月遊び」など、日本を感じるイベントを「おやじボランティア」を組織し実施

＊「保護者の中にはスペシャリスト」がいっぱい。ミシュランガイド一つ星シェフの和食のひみつについて講演と実習、航空会社の現役のパイロットやキャビンアテンダントさんの講演、チョコレートの本場ベルギーで有名な日本人パティシエの講演と実習など、楽しい「放課後企画」を実施

＊音読発表会の保護者メッセージカードを当日ホールに掲示（嬉しい声をすぐ児童生徒に届ける）

朝の読み聞かせボランティア

(3) 在外公館や学校理事会との連携を深める学校へ

＊安全対策を積極的に進めるため、在外公館にご理解とご支援をいただいた。（警備員の配置、防犯カメラの設置、1 階窓ガラスの強靱化、パニックルームの設置、校門開閉カードのIC 化など）

＊児童生徒数増加に伴う安全体制の不備を解消するため、経費をかけても専任教頭を配置することを学校理事会にご承認いただいた。（迅速なファーストエイド、困り感のある子どもや保護者へのきめ細かな対応、講師へのタイムリーな指導助言の充実）

4．まとめ

国語学習の集大成として学年末に「学校文集」を作成している。その中から子どもの書いた文を一部紹介する。

「…校庭で遊んでいた生徒たちに『あっ外国人だ』と言われ、家に帰って母に『日本人のお面が欲しい』と言ったくらい絶望した。…補習校に頑張って通ったお陰で、そして母のお陰で、私は外国人ではなく、日本人でもあり、ベルギー人でもあることを学びました」

「…せっかくの週末なのに、なぜ勉強しなければいけないのかと反抗して、親を困らせることがたびたびありました。…2 つの文化を右往左往しながらの私…決して混ぜることのできない 2 つの文化を、どのように自分の中で生かしていくのかを補習校生活で自然に学べたのだと思います」

多言語・多文化の中で生活している駐在員家庭の子どもたち、国際結婚家庭の子どもたち、在外での生育年数が日本より長い子どもたち…様々な背景の中で生きている子らが、年間 40 回土曜日に集い、普段通う学校とは違う「日本の学校生活」を送りながら、「日本人」であることを自らに問い、考え、誇りに思う場所が、ブラッセル日本人学校補習校であった。子どもたちにとって、決して単なる「補習」の場ではなく、日本につながる場、また一人ひとりの人格を培う場として、さらにその後の人生において物事を考える際の基点となる母校になるようにと、魅力ある学校づくりに邁進した。補習校で学んでいる子どもたちは、まさに「高度グローバル人材」そのものであり、日本とベルギーそして世界との架け橋になり得る宝物であった。

今回の派遣で学んだことを、札幌市の教育に活かしていくことが私の使命だと考えている。このような研修の機会を与えてくださった札幌市教育委員会や文部科学省、並びに深いご理解と多大なるご支援をいただいたベルギー日本人会、ブラッセル日本人学校理事会、在ベルギー国日本国大使館の関係者の皆様に心より感謝する。